第 49 回　広瀬川の三つの淵の話

今年 4 月、朝の広瀬川散策を再開した。

朝の散策を中断したのは昨年 5 月で、短期間ではあったが入院生活を経験し、その後歩くという習慣から疎遠になっていた。昨年の入院生活については 2012 年 8 月の特別寄稿「宿痾と QOL」ですでに述べたので、ここではとくに触れないが、筆者自身の鼻の手術がすべて内視鏡によって行われたことは追加しておきたい。

近年は多くの診療領域で診断や治療に内視鏡が多用され、筆者の専門領域である呼吸器の外科においても胸腔内視鏡による肺切除やリンパ節廓清術などが多く行われるようになっている。しかしながら複雑で広範囲におよぶ病巣や、近年の進歩した診断技術によっても正確には把握されるとは限らないような、ある程度進行が予測されるような疾患に対しては、従来の直視下手術が根治性や安全性からみて適応となるのは言うまでもない。

昨秋からこの春先にかけての異常気象の影響が現在も続いていたことや、自分自身の加齢現象も関係しているためか、ほぼ1年間中断した朝の広瀬川散策を再開して二ヵ月過ぎても、朝の 30～45 分間程度と中断前のように距離はこなせず、散策開始三ヵ月後の 7 月には夏の猛暑もあって再び中断しているこの頃である。

かつては自宅から広瀬川に架かる澱橋（約 12 分）から川に沿った散歩道をへて上流の牛越橋に至り（両橋の間約 20 分）を迂回して自宅まで一回りするという約1時間のコースが多く、時にはそれよりも長距離かつ長時間のこともあったが、再開後の三ヵ月の間は牛越橋手前から取って返すようになっていた。

澱橋の北側袂の近くに、広瀬川のほとりを舗装された北岸散歩用歩道（自転車を含む車両通行禁止となっている）の入り口があり、その歩道から間もなく分かれて川岸近くを併走する小道があり、それも半分ほど舗装されている。川の南側の対岸は段丘といわれるように断崖になっていて、澱橋対岸のたもと付近から立ち上がり、上流に向かって数百メートル続いている。その間川には支流が分かれており、本流と支流に囲まれた中洲が存在している。中

洲にはかなりの大木も散在している。断崖の断面は少なくとも 4 層になっており、地層の時代の古さを連想させる。それらを脇目にしながら散策を続けるのである。

青葉山を抱えながら西部から南方へと大きく蛇行して流れる広瀬川には上流から中流にかけて、澱橋まで 13 の淵（深み）があるが、散策再開した以前より短い距離になっている路の途中に淵がある。牛越橋手前にある引き返す目印としている地点まで三つの石碑が建っているが、初めの石碑（松淵）は散歩道の入り口から間もなくの地点にあり、そこから断崖の地層の分かれ目がよりはっきりみえる。石碑には「この淵は松渕といわれ、江戸時代に対岸の川内に仙台藩士白川七郎の屋敷があり、そこの松の老木にちなんで名付けられたと伝えられています」とある。仙台叢書（伊達世臣家譜）によると白川氏は貞山公（伊達政宗）以来の家臣で、伊達慶邦（仙台藩 13 代藩主）の時代には主要家臣でご一門のひとりになっている。朝の散策中に何度も対岸を探したが松の老木のような樹木は見つけることができなかった。

松淵から上流約 3 分の場所に二つ目の石碑（新兵淵）があり、そのあたりで中洲が尽きている。石碑には「この淵は、新兵淵と呼ばれ、対岸の崖の上に駐屯していた旧陸軍野砲第二連隊の新兵さんが、この付近で泳いだり洗濯したりしていたところから名付けられたものです」と書いてある。新兵淵を望見しながら昔を思うと、新兵さんの様子が目に見えるようである。野砲兵第二連隊は 1887 年（明治 20 年）創立という伝統ある仙台第二師団所属で、太平洋戦争ではガダルカナル島戦で壊滅的損害を受け、仏印（仏領印度支那：現在のベトナム・カンボジア・ラオス）で終戦を迎えた。仙台第二師団は日露戦争で名高い乃木希典将軍が第二代師団長であったことでも知られている。

新兵淵からさらに上流へ向かって約 5 分で、再開した散策での引き返す地点としている三つ目の石碑（観音淵）に達するが、そのあたりで対岸の段丘が終わっている。石碑には「この淵は観音淵と呼ばれ、対岸にある観音堂に祀られた正観世音にちなんで名づけられたもので、この観音堂は現在お堂のみが残っていますが、かつては仙台 33 番目観音札所の1番とされる修験の寺でした。」と書いてある。

観音堂は、限りない慈しみの御心を身近に感ずる霊場とされており、観世音菩薩（観音）という女性の仏様で、人が亡くなった時、手に蓮の蕾をもって迎えに来て、これに亡くなった方を乗せて中央に阿弥陀如来、右に勢至菩薩とともに極楽へ行くというのである。

朝の広瀬川散策でこれらの広瀬川の三つの淵を巡り歩くことができるが、さらなる上流にはかつて筆者が少年時代にしばしば親しんだ淵がある。

牛越橋上流には河原が広がっている場所があり、河原からすぐのところに日本で初めての水力発電所である三居沢発電所（1888 年設立）があり、東日本大震災で三日間休止したが現在も発電を行っている。さらに三居沢よりも川の上流部には深みを伴った大きな岩場がある。その深みは賢淵（かしこぶち）といわれ仙台藩制時代から水練場とされてきた。筆者が子供のころは遊泳できたが、現在は禁止されている。現在そこに記念碑が建てられ「過ぎ去りし、遠き夏の思い出の賢淵よ、いまいずこ」と書かれてある。さらに上流にはいくつかの淵があり、ウグイやオイカワなどの清流に住む川魚がみられる。

晩秋から春へと不順な天候が長く続いた後に再開した広瀬川河畔の散策は、真夏の今は再び中断しているが、秋になったらまた再開しようと思っている。